

論文審査の結果の要旨

令和6年2月1日

| | | | |
|---|--|-------------------|----------------|
| ○課程博士 論文博士 | 臨床教育学 | (ふりがな) 学位請求者氏名 | こやまひさこ 小山久子 |
| 論文 題目 | 道徳科授業の見取りを支援する評価方法に関する研究 ーテキストマイニングとベイズ統計の併用ー | | |
| 審 査 員 (3名以上) | | | |
| 主 査 氏 名 印 | 副 査 氏 名 印 | 副 査 氏 名 印 | |
| 押谷由夫 印 | 河合優年 印 | 松下良平 印 | |
| 論 文 審 査 要 旨 | | | |
| <p>論文の概要</p> <p>本研究は、教師が子どもの道徳性に関する意識を把握し、子ども自らが多様に考え思考を深めていける授業を創っていくとともに、教師自身の子どもの見方・授業観・教育観を再構成できるような「新たな道徳科授業評価方法」を構築することを目的とし、特に次の4点を中心に追究している。第1は、先行研究を分析することから課題を確認し、本研究で明らかにすることとその意義を明確にする。第2は、そのことを踏まえて、テキストマイニングとベイズ統計分析を活用した「新たな道徳科授業評価方法」を提案する。第3は、提案した評価方法が授業改善と教師自身のリフレクションにどのような影響を与えるかを検証するための視点を明確にする。第4は、臨床の場で「新たな道徳科授業評価方法」を試行し、統計的手法を用いて明らかにしたデータが授業改善と教師に与える影響を検証し有効性を確認する、というものである。</p> <p>第1章においては、先行研究の分析を通して、「子どもの実態」をもとに一人ひとりの道徳性の発達を把握し、子ども自身が道徳性を発展させていくという道徳科の特質を踏まえた「新たな授業評価方法」の開発が課題であることを確認している。そして「新しい道徳科授業評価方法」として、第1段階では、テキストマイニングの共起ネットワークを用いて授業に関わる教師と児童の意識を比較し、「ずれ」等を読み取る。また、対応分析によって、個々の児童の特徴的な考えを読み取る。第2段階では、ベイズ統計によってコード（育みたい道徳性）に対する児童の反応を「検証的に確認」し、コードへの反応をベイズ検定によって全体的に読み取る。また、ベイズ推定によって個々の児童の反応を読み取る。そのことを通して教師の見取りを補完・融合し、統合的に解釈することによって、児童の学習状況を推測する。そのことから教師のリフレクションを促進し、教師自身の子どもの見方・授業観・教育観を再構成し授業改善へとつなげていく、という方法を提案している。</p> <p>第2章では、提案する「新しい道徳科授業評価方法」が教師にどのような効果をもたらすのかを検証するために、道徳科の授業に求められるあり方について追究している。デューイの理論を手がかりに、「他者とのコミュニケーションを伴った思考プロセスを子ども自身がたどりながら、自らのうちに道徳性を涵養する」という道徳科授業のあり方を想定し、子どもを主体とした道徳科における「問題解決的な学習」に向かうための理念的な基盤を5点にわたって確認している。そして、これらを、より授業実践レベルで考察し、「新しい道徳科授業評価方法」の第1段階、第2段階で提示されるデータをもとにした解釈や統合的な評価の解釈において、教師のリフレクションにどのような影響を与えているかを検証する視点として捉え直し、第3章へとつなげている。それらは、「学び育ち合う子どもと教師の関わり」という視点、「価値判断できる子どもの成長のために」という視点、「コミュニケーションによって深まる自己理解・他者理解」という視点、「授業評価につながる子どもの反応(response)」という視点、「真にアクティブラーニングである道徳科授業」及び「子どもと子ども、子どもと教師におけるケアの関係」という視点である。</p> <p>第3章では、「新たな道徳科授業評価方法」を臨床の場(小学校)で試行し、教師を支援する授業評価方法になりえたか、教師に対する支援として可能になったことは何かを臨床実践を通して検討し有効性を確認している。調査対象は、A小学校の2、4、5年の各1クラス。方法は、2、4年は5回、5年は3回各2コマの授業を学級担任が行い、事前と事後に検討会を設けている。児童の反応</p> | | | |

は、各授業の感想文を分析している。

まず、2年の「たった3びきだけの池」という教材を用いた授業の分析結果を中心に、「新しい道徳科授業評価方法」で提案した内容の検証を行っている。その結果、第1段階の分析からは、教師と児童の意識のずれを確認し、抽出語が原点から離れている児童の検討から教師が気付かなかった児童固有の見方・感じ方を読み取っている。第2段階の分析からは、各コードと児童全体の関係性を推測し、どのコードにおいても児童の反応が高いことを読み取っている。また、授業における個々の児童についての検討では、各コードへの反応が低い児童でも、他の児童とは、異なる場面で、異なる思いをもっていたことを捉え、その児童のよさを推測し、授業改善へとつなげている。2年の他の授業や、4年、5年の授業分析からも、「新しい道徳科授業評価方法」の有効性を確認している。

これらの結果から、教師の見取りをどのように支援できたかを中心に、確認できたことをまとめている。第1は、「教師と児童の意識のずれを確認」でき、児童なりの見方・考え方等を柔軟に生かした授業を進めるきっかけとなっている。第2は、「授業改善につながる新たな情報提供」を行うことで、教師は自らの子どもの見方、授業のあり方について捉え直し、児童のよさを生かした授業改善に結びつけている。第3は、「見えない事実を浮きあがらせ」、不可視の事実を発見して児童理解を深め、教師の子どもの見方に影響を与えている。第4に、「新たな道徳科授業評価法を用いて教師自身のリフレクションを促」している。つまり、教師の子どもの見方、授業観、教育観全体に影響を与えていることを明らかにしている。また、教師のリフレクションを支える教師間の対話(同僚性)の有効性も確認している。

審査結果

本論文は、道徳科に求められる「新たな道徳科授業評価方法」を提案するものである。その特徴は、教師が子どもの道徳性に関する意識を不可視な部分も含めて把握でき、その解釈を通して道徳の授業のあり方へとつながる方法であり、教師自らの子どもの見方・授業観・教育観を再構成できるような方法だということである。その有効性について臨床実践を通して検証し、まとめている。本論文の内容について、慎重に審議された結果、特に次の点が評価された。

第一点は、道徳科の課題である、教師が教える授業観の転換に向けて、従来の「目標に準拠した評価」ではなく、「目標にとらわれない評価」を取り入れた教育評価の新たな考え方を提示し、多様な手法を用いてその実質化を試みている点である。そのことによって、道徳科が求める子ども自らが多様に考え思考を深めていく授業を創っていくための方法についても、実証的に明らかにしている。

第二点は、授業における、「子どもの事実」を明らかにする方法として、テキストマイニングとベイズ統計を併用して、新たな方法を開発している点である。教師による見取りは、教師の立場からの見取りに偏りがちである。そこを補完させるために、子どもの意識をもとにした「子どもの事実」を明らかにする必要がある。テキストマイニングとともに、脳科学等の分野で注目されているベイズ統計を活用して、一人ひとりの反応の状況を多様に捉える方法を開発し、その分析結果を教師の見取りと補完・融合しながら統合的解釈へとつなげている。

第三点は、教師のリフレクションと結び付けて、授業評価方法を提案している点である。従来の授業評価方法に関する研究は、授業をどう改善するかに重点がおかれ、子どもたちがより効率的に学ぶための指導方法を追究するという研究がほとんどといってよい。本研究は、授業改善を目指す、同時に教師自身の子どもの見方、授業観、教育観の変革をもたらす授業評価方法の開発を目指している。「新しい道徳科授業評価方法」が教師のリフレクションにどのように影響するのかも検証し、その有効性を明らかにしている。検証するための視点を、デューイ等の理論や提案をもとに道徳科の授業のあり方を考察して導き出し、分析を行っている。

このことは、この方法が単なる教師の授業評価支援ツールにとどまらないことを示している。つまり、「同僚性」による教師の成長をも支援することにつながる。また、子どもの個々の反応状況を知る手立てとなるベイズ統計によって、例えば教材評価への新たな道をひらくことにもつながる。

本研究が、道徳という子どもの内面的な世界が特に重視されなければならない教科における、「子どもの事実」にアプローチする一つの方法を提起したことはきわめて意義深い。さらに簡易に使用できるように改善していく必要があるが、AIを活用した例を附表で掲載しており、本研究をもとに、新たな評価パッケージの開発へと発展することが期待される。

最終試験(公聴会)の質疑応答内容を含めて、本論文は、博士課程の要件として便覧に示されている「問題、方法、討論、社会への還元性に関する理論的整合性、論文の独自性など」の観点から、武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科博士後期課程における学位論文として十分合格ラインを超えていることを承認し、投票の結果、博士学位(臨床教育学)授与について「合」と判定された。



